

6 . 事業内容	1 . 概要 本事業は、ガザ地区ラファ国境の危険地帯に住む7～13歳（3～7年生）の健常児童（サナブリ学校）と、ラファ地域全体に住む9～15歳（4～9年生）の聴力障がい児童（エルアマル社会福祉協会：ERS※¹附属聾学校）に対し、課外授業の枠でトラウマによるPTSD予防のための心理社会的ケアを実施し、さらにケア実践者を養成するものである。 ガザ地区の人々は度重なる紛争と閉鎖環境からくるストレスに日常的にさらされており、全ての人々に心理社会的ケアが急務とされている。放置しておくことでPTSD発症や、憎しみの連鎖により攻撃的になる危険が潜んでおり、まずは児童の心の安定をはかり、さらに家庭や地域への波及を目指す。 1年目はそれぞれ約60名の児童、計120名を対象とし、約20名ずつにクラス分けをし、各クラス週1回のペースでケアクラスを実施した。さらに、聴力障がい児と危険地帯の児童の合同クラス・キャンプを実施し、相互理解を深める活動を取り入れた。2年目は、危険地帯の児童は新しい児童3～7年生64名を、聴力障がい児童は4年生10名を新規で選出し5～8年生36名は継続してケアクラスを実施した。2年目は、時間軸を入れた四次元表現の分野に映画制作を取り入れ、表現力や創造力により深みをもたせた。心の痛み「向き合い、表現し、整理する」というトラウマ予防のステップを訓練している児童達は、少しずつ自分の気持ちを伝えることができるようになり、感情のコントロールができたり、行動が落ち着くなど心の耐性が強くなっており、GHQ（一般健康質問紙）でも有意にスコアの改善がみられた。また2年間を通し、エルアマル社会復帰協会（ERS）※¹の教師を中心に、ケア実践者（ファシリテーター）が
----------	--

	10名養成される見込みである。さらに2年目にケア実践者用の英語版ケアマニュアルを作成している。 3年目は、本事業の最終年度として事業終了後も継続して心理社会的ケアの実践ができるよう、ケア実践の技術移転に特に力をいれる。新たに5名のファシリテーターを養成するのに加え、カウンターパートの ERS の全教師を対象に学習会を設ける。さらに、ケアマニュアルをアラビア語で制作し、関係機関に広めていく。通常のケアクラスは、危険地帯の児童は新しい児童3～7年生60名を、聴力障がい児童は4年生約10名の新規と5～8年生約50名を継続し受け入れる。聴力障がい児は、聴力という自身に起因する障がいを抱えていることにより、常にそこからくるストレスに耐える力を養う必要がある。複雑化している問題を抱える聴力障がい児のケアは、徐々に効果が見られるものの、3年かけてじっくりケアをする必要であると判断した。表現方法の展開は同じであるが、異なる内容をテーマにすることで違う活動となり、多層的で充実したケアを提供する。また、四次元表現のクラスでは、映画ワークショップに力をいれる。この2年間を通して、パレスチナ人は演劇が好きであるが、各人が自分の主張を表現する「プレゼンテーション型演劇」の傾向が強く、会話になりにくく物語性が低くなるという欠点があった。そのため、より無理な緊張や負担がなく対話を重視した、物語性の深い作品に取り組める映画制作を取り入れ、子ども達自身で撮影方法を習得し、作品作りと上映会を実施する。
--	---

※1：エルアマル社会福祉協会（ERS:Elamar Rehabilitation Society）

当団体の業務提携団体で、1991年からエルアマル聾学校にて聴覚障がい児童に特別支援教育を提供している。

聴覚専門クリニックでの診療やリハビリ等も提供している。

	2．活動詳細
--	---------------

	2-1. 児童への心理社会的ケアの実践 2-1-1. 心理社会的ケアクラス（年間） 1年間のプログラムで「描画～二次元表現」→「粘土細工～三次元表現」→「音楽、映画～四次元表現」と表現形式を進化させていく（添付資料1）。聴力障がい児クラスは、それぞれのワークショップの内容を昨年と変化させ、より深いテーマに取り組んでいく。各クラス約20名とし、危険地帯の児童が3クラス、聴力障がい児童が3クラスの合計120名が、週1回のプログラムを1年間行い、最後に発表会・修了式を行う（添付資料1）。3年目は各クラスが自分たちで映画制作に取組み、それを発表会で地域の方に見てもらうことで、心理社会的ケアの最終段階「社会との再結合」までを目指す。 2-1-2. 統合クラス、オープンディ（課外活動）の実施（年間） 危険地帯の児童と聴力障がい児の交流を通し、相互理解、相互交流、相互協力を目指した課外活動である。お互いが抱えるストレスやトラウマを共有し、その解決に向けての分かち合いを可能にするための活動である。統合クラスは3クラス合同でそれぞれ隔週1回、オープンディは合同の日帰り遠足を年2回実施する。 2-1-3. 夏期修学旅行（サマーキャンプ）の実施（6月） 聴力障がい児童と危険地帯の児童全員120名が参加する年1回、6日間のプログラムである。内容は、描画ワークショップ（以下WS）、粘土細工WS、音楽WSを行う一方で、集中した時間と空間の中で、少人数グループセッションを行
--	---

い、より一層のコミュニケーション能力の増進、自己の内面の洞察、心的外傷の理解と PTSD からの予防能力向上を目指す。

2-1-4．学校や家族との情報交換（年間）

ファシリテーターは、学校や家庭における児童の行動・態度・人間関係等の変化を教員や家族から聞き取り、児童のケアプランに役立てる。また、教員や家族にもケアクラスでの児童の様子をフィードバックしていく。

2-2．人材育成

2-2-1．ファシリテーター養成講座（年間）

心理社会的ケア実践者を養成する講座である。5回の座学と心理社会的ケアクラスでの現場教育（OJT: On Job Training）から構成される。3年目は新しい5名を対象とし、1・2年目の研修生も再学習の機会を提供する。（添付資料2）

2-2-2．海外研修（8月）

ファシリテーター養成講座の研修生からリーダー候補を1名選定し、日本に招聘する。この研修は東日本大震災で実施された心理社会的ケア学習、神戸と広島を視察し、阪神大震災や原爆の被害からの復興について学習してもらう。また、東日本大震災後に心理社会的ケアを受けた児童や関係者との交流、ガザの報告会の開催、桑山専門家からの映画ワークショップ研修受講等も計画している。自然災害による心的外傷も、紛争や障がい者差別による心的外傷も、ケア手法について違いはなく、有益であり、他の研修生の波及が期待できると考える（添付資料

	3)。
	2-2-3. ERS 教員との学習会 これまでの2年間の事業を通して、研修を受けた ERS 教員も増えた。一方で、まだ研修を受けていない教員もいるが、学校での児童の態度の変化（攻撃性の低下や集中力の高まり等）を目の当たりにし、多くの教員が心理社会的ケアの有効性を認識し始めてきている。3年目は、教員全員（約25名）への学習会を開催し、事業終了後も心理社会的ケアの手法が学校で継続されることを目指す。 2-3. 心理社会的ケアの普及活動 2-3-1.「心理社会的ケア」シンポジウムの開催（1回） ガザ地区において、心理社会的ケアが広く認知され、最新の知見の共有を目的にシンポジウムを開催する。対象は、心のケアの専門家や学校教育関係者を始め、広く地域の方々50名を目標とする。内容は、これまでの同ケアの歴史、パレスチナにおける展開、本事業の概要と成果、将来への展望等を検討している。 2-3-2.心理社会的ケア実践マニュアル制作 ガザ地区での2年間の心理社会的ケアの知見を盛り込んだ、アラビア語版の実践マニュアルを制作し、ケア実践者となりうる関係者200名に配布をする。
7. これまでの成果、課題・問題点、対応策など	①これまでの事業における成果（実施した事業内容とその具体的成果） 1. 児童への心理社会的ケアの実践 【内容】 心理社会的ケアの実践（写真言語・描画WS（二次元表現）、粘土細工WS（三次

元表現)、音楽WS・演劇WS(四次元表現)、オープンディ・サマーキャンプ・統合クラス(危険地帯の児童・障がい児童の交流))

【これまでの成果】

- ・ 直接裨益者(ケアクラス参加者)

1年目 120名、2年目 120名(36名は同じ児童)

合計 240名(達成率100%)

- ・ 間接裨益者(ケアクラスの家族)

1年目 120名×5名(家族平均人数)=600名

2年目 120名×5名(家族平均人数)=600名

合計 1200名(達成率100%)

- ・ 一般健康質問紙(GHQ: General Health Questionnaire)によるケアプログラム前後のスコア平均値の改善(1年目 10.0→8.4)がみられた。
- ・ 全体的に自己表現力が向上し、豊かな感情表現が可能になったことで、感情の自己コントロールが上達した。
- ・ 統合クラスでは今年から手話の時間をもうけ、健常児と障がい児の交流が増えた。
- ・ 学校での授業中の態度や友達との人間関係、日常生活にも良い変化が見られた。

2. 人材育成

【内容】

専門家によるセミナー実施、ケアクラスでの実習

【これまでの成果】

- ・ 直接裨益者 (ファシリテーター養成研修生)

1 年目 5 名、2 年目 5 名 (研修中)

合計 10 名 (達成率 100%)

- ・ 間接裨益者 (ファシリテーターが研修内容を実践した対象児童以外の児童数)

1 年目

エルアマル 3 クラス (1 ～ 3 年生) × 11 名 = 33 名

エルアマル以外の学校 3 校 × 100 名 = 300 名

2 年目

エルアマル 3 クラス (1 ～ 3 年生) × 11 名 = 33 名

エルアマル以外の学校 2 校 × 100 名 = 200 名

写真ワークショップ開催 15 名

サマーキャンプワークショップ開催 40 名

合計 621 名 (達成率 103.5%)

②これまでの事業を通じての課題・問題点

1. 聴力障がい児童へのケア継続の必要性

聴力障がい児童は2年間でケアを卒業する計画であったが、聴力という自身に起因する障がいを抱えていることにより、常にそこから来るストレスに耐える力を養う必要がある。また、発達段階や手話能力の差も大きく、児童のレベルに合わせて、ワークの手伝いやコミュニケーションの取り方等に個別対応が求められる

る。ガザでは、紛争や閉鎖環境から来るストレスに加え、これまで聴力障がい児童へのケアが教育現場で適切に行われてこなかった経緯もあり、長期的なケアが必要だと判断した。

2．四次元表現の未熟さ

通常四次元表現の中の演劇 WS は活動の総仕上げと位置づけ、実施してきた。しかし、児童の演劇は各人が自分の主張を表現する「プレゼンテーション型演劇」になり、会話や物語性が低くなるという欠点がみられた。

3．NGO 登録

パレスチナ自治州政府の NGO 登録が 2014 年 8 月に完了後、9 月上旬にイスラエル政府社会福祉省にイスラエル側の NGO 登録申請書類を提出した。まだ認可がおりていない。

③上記②に対する今後の対応策

1．聴力障がい児へのケア継続の必要性

障がいに起因するストレスも含め多様なストレスにさらされているという点に対し、3 年目もケアを継続し対応する。具体的には、描画・粘土等のそれぞれのワークショップの表現形式でのテーマを変化させ、表現力をより高めていく。また、発達段階や手話能力の差という点に対しては、引き続き学校教員との連携を強め、児童ひとりひとりの発達段階にあった個別対応を行う。

	2．四次元表現の未熟さ 演劇では会話や物語性が低くなるという点に対し、3年目は四次元表現として映画WSに特化する。映画WSはシーン毎に撮影を進めていくため、台詞を記憶する緊張や負担を減らし、加えて会話も豊富に取り込め、その都度表情や台詞回しについて検討し深めることができる。まずは夏休み期間に、身近な社会問題をテーマにドキュメンタリー作品に取組み、児童が撮影の基礎を身につけ、11月からはより物語性の深いフィクション作品を自分達で制作する。児童が自分たちで制作する意義は、映画制作を通して客観的な視点を身につけること、どのように人に伝えたら良いのかを考えることで、より心の整理と心的外傷への予防力を高めることを期待している。さらに映画上映会を通し、より多くの人に心のケアの取り組みを見て頂くことでケアの最終段階である価値観を高めること（社会との再結合）を目指す。 3．NGO登録 イスラエル社会福祉省へはこれまで何度も照会を続けてきたが、まだ認可の見通しがたっておらず、今後は社会福祉省大臣へも直接働きかけることを考えている。また、在日イスラエル大使館の領事イスラエル・ストロロフ氏からも働きかけをお願いしており、同氏も直接関係者に電話を入れるなど、アプローチを行っているが、動きがない。一刻も早い登録完了を目指したい。
8．期待される成果 と成果を測る指標	1．心理社会的ケアの実践 【期待される成果】 1) 児童のコミュニケーション能力・表現力が向上し、グループワークに積極

	的に参加できるようになること。 2) 児童が自身の内的洞察ができ、自己の存在や人生観に積極的な意味合いが見いだせるようになること。 3) 空爆・戦闘によりもたらされる心的外傷について、予防力が増すことで、PTSD から心を守れる力が身につくこと。 【成果を図る指標】1) 2) 3) 全てに対して 1) GHQ (The General Health Questionnaire:一般健康質問紙) ケアクラスに参加することで心の中の「健康度」がどの程度変化したのかを評価する。事業開始時 (Pre-test) 、終了時 (Post-test) に行い、数値による比較検討を行う。GHQ は世界で汎用されている質問紙であり、アラビア語版もあるため選択した。数値目標として、GHQ の平均値が前後で有意に改善 (差) が認められることを成果とする。 2) バウムテスト (投影法の心理テスト) 事業開始時と終了時、サマーキャンプの前後で行い、その変化を比較する。これは一本の実のなる木を描いてもらい、そこから精神的エネルギー、安定度、将来への希望や願いの度合いといったものを読み取る。数値目標としては、バウムテストにおける「占有率」と「実の数」の平均値が、事業期間の前後、サマーキャンプの前後で有意に改善 (差) が認められることを成果とする。 3) 教員と家族へのアンケート調査 児童が通学する教員と家族を対象に、ケアクラスに対する評価、児童の変化についてアンケート調査を実施し、6割以上の回答者からケアの効果の評価を受け
--	--

	る。
--	----

	２．人材育成 【期待される成果】 心理社会的ケア技術を身につけた専門家が５名養成され、子どもたちへの関わりが改善されていくこと。 【成果を図る指標】 １）事業終了時に筆記試験を行い、得点が８割以上の受講生に「修了証」を発行する。４人以上の合格を成果とする。 ２）海外研修に参加した研修生には、習熟度テストを課し、８割以上の正答を成果とする。（８割以下の場合は再度追加の講習を行い、レポートを課し、内容の習熟度を評価する。） ３．心理社会的ケアの普及活動 【期待される成果】 本事業のプログラム内容や成果がガザ地区に広く認知されること。 【成果を図る指標】 １）シンポジウムで５０名以上の出席者を募り、参加者アンケートにて心理社会的ケアへの理解が６割以上の評価をうける。
--	---

	2) 最終発表会で映画上映を行い、300名以上の参加者を募り、参加者アンケートで児童の作品や心理社会的ケアの成果を6割以上の参加者に評価される。 3) アラビア語版のマニュアルを200冊製本・配布し、受領者に心理社会的ケアの知識・技術テストを実施し6割以上のスコアがとれていることを成果とする。
--	---